

# 「マグロの姿」

—初稿—

2025/2/28

さいの

〈人物表〉

タカノ(30) 会社員

モリヤ(24) タカノの後輩

大将(60) 寿司屋の大将

1. 寿司屋・内(夜)

回らない寿司屋のカウンターに、並んで座っているモリヤとタカノ。

大将「はい、マグロ」

二人の寿司下駄に、マグロの握りを乗せる大将。一口で食べるタカノ、箸で掴んで眺めるモリヤ。

モリヤ「……マグロって、どうやって泳いでるんですかね?」

タカノ「(食べながら) え、どうやってって、普通に?」

モリヤ「……普通に?」

タカノ「……うん」

モリヤ「これが、こうやってるってことですか?」

モリヤ、箸を持ってない方の手を、ひらひら。

タカノ「(ボケと違って) いやいや、そういう店じゃないから」

真顔のモリヤ、マグロを食べる。飲み込むタカノ。

タカノ「え? マジ?」

モリヤ「うつま。(大将に) あ、マグロもう一回」

大将「あいよ」

タカノ「……笑っちゃいけないやつ?」

モリヤ「何がですか?」

大将「はい、マグロ」

二人の寿司下駄に、マグロの握りを乗せる大将。

タカノ「……マジか。ごめん、ごめん。あのね、これがマグロじゃないから」

モリヤ「え、これマグロじゃないんですか?」

タカノ「いや、マグロなんだけど」

モリヤ「ですよね? マグロって言って出されましたよね?」

タカノ「なんだけど、マグロなんだけど。その、あるから。

本体が。マグロの」

モリヤ「……どういふことですか?」

タカノ「えっ、どうしよう。魚知ってる? 泳いでる魚。」

見たことある?」

モリヤ「はい」

タカノ「あ、あるんだ。え、マグロは、魚だよ?」

モリヤ「はい」

タカノ「それも知ってたんだ」

モリヤ「はい」

タカノ「……何がわかんない? 逆に?」

モリヤ「ちよっともう教えてくださいよ」

大将「はい、マグロ」

二人の寿司下駄に、マグロの握りを乗せる大将。

大将、乗せながら笑いがこぼれる。

大将「楽しそうで何よりです」

タカノ「(大将に) お恥ずかしい話です。(モリヤに) そ

ういう店じゃないからな、ここ」

大将「お若い方だとご存知ない方いらっしやいますね」

タカノ「え、そうなんですか?」

大将「ええ」

モリヤ「(大将に) 教えてくださいよ」

タカノ「馬鹿」

大将「そうですね……」

何やら探す大将。

タカノ「すみません、付き合ってもらっちゃって」

大将「握りの感じになる前に、こういう塊になってるんで

すよ。サクって言うんです」

サクを出して見せる大将。

タカノ「……そっから?」

モリヤ「おー?」

大将「マグロの握りに乗っているのは、(サクから一切れ

切り出して見せる)すでにサクを一口大に切った

ものなんです」

モリヤ「えっ?……ああ……そうなんすね」

タカノ「ああ、よかった」

大将「そう。……で、このサクが海を泳いでるんです」

モリヤ「え、どうやって?」

大将「こういう感じで」

ゆらゆらとサクを動かす大将。

タカノ「……は？」

モリヤ「え、でも（切り身）こっちの方が泳ぎやすそう

じゃないすか？ 形的に」

大将「不思議ですよね」

タカノ「ちよつと、大将！」

大将「え？」

タカノ「いいんですよ、もう！」

大将「（モリヤに）あちら見てみると、よく分かりますよ」

モリヤ「あ、本当だ」

タカノ「え？」

カウンター後方の一角に水槽が置いてある。

水槽の中には、サクがゆらゆらと泳いでいる。

水槽に両手をつけて覗き込むモリヤ。

モリヤ「すっげー」

タカノ「……」

水槽の電源を切るタカノ。

ゆらゆらと泳いでいたサクは沈む。

モリヤ「あれ、死んじゃった」

大将「お客さん、困ります」

懐から拳銃を取り出して、大将の脳天を撃つタカノ。

大将はアンドロイド。機械音を発しながら倒れ、今

にも爆発しようとする。

モリヤ「えー？」

モリヤの手を引くタカノ。

## 2. 同・外観（夜）

モリヤを連れ、暖簾をくぐって走り出すタカノ。  
爆発する寿司屋。

## 3.

### 裏路地（夜）

路地裏を走っている二人。

モリヤ「当局の寿司屋？ あれが？」

タカノ「ああ」

モリヤ「ってことはマグロは？」

タカノ「もちろんあんな姿じゃない。あの水槽もテレスク

リンの一種だ」

モリヤ「そんなあ。じゃあ本当は、どうやって泳いでるんですか？」

タカノ「そんなの決まってるだろ。マグロは……」

モリヤ「え？」

タカノ「……くそ。ってことは、多分このあたりはもう、

奴らの島だ」

サイレンの音。辺りが赤いランプで照らされる。

大量の当局の車。

#### 4. スラム街・露天市場（朝）

市場に置かれたモニターの画面。

モニター音声「こんなに美味しいこの『するめ』、安心し

てお召し上がりいただける非殺生性タンパク質！

今ならなんと……」

市場をうろつく男二人。サングラスを外すと、タカノとモリヤ。打って変わって髭が伸びている。みすぼらしい格好。

市場に並べられた一口大のジャーキーのような干物。

「するめ」「しおから」「よっちゃん」という札。

タカノ「……するめ、しおから、よっちゃん。いずれも

元々は、イカ、だったはず」

モリヤ「イカって？」

タカノ「俺もそれが分からない」

モリヤ「魚ですか？」

タカノ「たぶん」

モリヤ「じゃあ、泳いでるんですか？」

タカノ「……さあ」

モリヤ「生きものですか？」

タカノ「……分からない」

モリヤ「（するめを拾って）あと少しな気がするんだけど

なあ。見たら一発で思い出せるのに」

露天商に代金を渡し、商品を受け取るタカノ。

タカノ「（露天商に）これをどこで」

露天商「どこでしょうね」

手を広げてジェスチャーする露天商。

代金を上乗せするタカノ、露天商から紙を受け取る。

露天商「毎度あり」

タカノ「まだここは大丈夫か」

モリヤ「（追手に気づいて）しっ！」

当局の人間「いたぞ！」

当局の人間に追いかけられ、逃げる二人。

## 5. 水族館（夜）・外観

深夜の水族館。立ち入り禁止の立札。

## 6. 同・敷地内

鉄条網を乗り越えて敷地内に侵入する傷だらけのタ

カノ、モリヤ。二人の手には拳銃。

周囲を警戒しながら、静かに進む。

## 7. 同・建物内・水槽前

薄暗い建物内を歩く二人。

「スルメイカ」という説明札のついた水槽。

イカが（私たちの知る姿で）、泳いでいる。

モリヤ「やっぱり生きものだった……」

タカノ「（するめを手に）非殺生性の、タンパク質か」

奥へと進む二人。

大きな水槽の前に来る。

タカノ「あつた」

モリヤ「ああ、これが……」

息を飲む二人。

「クロマグロ」という説明札。水槽の中では、マグロのブロックがぶかぶかと泳いでいる。

水槽のすぐ横には、牛、豚、鳥の入ったケージがあるが、二人は目もくれない。(終)